30のキーワードで読み解く

オーストラリアの取説（トリセツ）

川野 寛 著

リント

はじめに

本書は一九九七年から二〇〇九年まで、英語学習誌*TOEIC Friends*および『TOEIC Testプラス・マガジン』に寄せた原稿を基に、必要な個所に手を入れて単行本にしたものです。「海外リポート」というコーナーで、オーストラリアの文化・習慣や社会制度など日本人に興味を引きそうなトピックを選び紹介してきました。この雑誌への寄稿のきっかけは、雑誌の編集者の父親がわたしの友人であったことです。その関係で、当時オーストラリアに家族で住んでいたわたしに白羽の矢が立ったわけです。

わたしたち家族が西オーストラリア州の州都であるパースに住み始めたのは、いまから二十二年前の一九八八年のことでした。当時日本で勤務していた製パン会社が、パースにあるケーキ屋チェーン店に資本参加し、企画担当としてその会社への出向を命じられたのです。そのケーキ屋チェーン店に十二年間勤務したのち、個人会社をパースで立ち上げて日本向けの貿易を行いました。そ

して、五年ほど前からは、パース郊外にあるトマト栽培農家での勤務を主な仕事にしています。

オーストラリアを簡単に紹介する意味で、二〇一〇年に英国研究機関のエコノミスト・インテリジェンス・ユニット（EIU）がまとめた調査結果を見てみましょう。この調査は、世界の百四十の都市を対象に、「世界で最も住みやすい都市はどこか」を尋ねたものです。

下の表を見ると、わたしが住んでいるパースは八位。しかも、オーストラリアにある都市が四つも入っています。なぜそこまでオーストラリアの都市は人気があるのか、わたしなりに、その理由を考えてみました。

●気候が良い

オーストラリアは、地中海性で、過ごしやすい気候の地です。夏は気温が四十度以上になることもありますが、乾燥しているので日陰に入るとあまり暑さは感じません。冬もほとんどの地域は

「世界で最も住みやすい都市はどこ？」

（二〇一〇年　EIU調べ）

一位　バンクーバー（カナダ）
二位　ウイーン（オーストリア）
三位　メルボルン（オーストリア）
四位　トロント（カナダ）
五位　カルガリー（カナダ）
六位　ヘルシンキ（フィンランド）
七位　シドニー（オーストリア）
八位　パース（オーストリア）
九位　アデレード（オーストリア）
十位　オークランド（ニュージーランド）

温暖で、霜が降りたり雪が降ることはめったにありません。

●インフラが整っている

都市部では上下水施設・道路・電信・公園などのインフラが整備されています。オーストラリアは車社会で、高速道路も市内を縦横無尽に走っています。高速道路は、もちろん無料です。

●人々に親しみがある

人々の仲間意識が強く、職業・地位・年齢・性別・民族などに関係なく、望めばだれとでも友達になれる雰囲気があります。

●国土が広い

内陸部は乾燥してほとんど人が住んでいないとはいえ、日本の約二十一倍の広さの国土に、日本の約十七パーセントていどの人しか住んでいません。日本より人口密度が低いので、家の敷地が広く、道路や公園なども日本に比べるとかなりゆったりとしてい

ます。

●自由でカジュアルな雰囲気がある

歴史が二百年余りと短いためか、しがらみや伝統から来る慣習が少なく、自由でカジュアルな雰囲気があります。大ざっぱでいいかげんと言えなくもありませんが、生活する分にはそのほうが居心地良いように思います。テレビ番組の放送が十分くらい遅れるのは日常茶飯事ですが、これなど日本ではまず考えられないことでしょう。

●社会福祉制度が整っている

医療と高校までの教育は公立だと無料です。国民はもちろんですが、わたしたち家族のように、国民ではなくても永住権を持っていれば、国民と同じサービスを受けられます。

オーストラリアの良い面ばかり述べましたが、もちろんこの国

にも多くの社会問題があり、嫌な面を目にすることもあります。でも、悪い面を上回るだけの良い面があるというのがわたしの実感です。しばらくは、居心地の良いオーストラリア生活を続けるつもりでいます。

本書では、オーストラリアを知るのに役立つ三十の話題を、英語のキーワードとともに紹介しています。内容はそれほど硬くないはずですから、気楽な気持ちで読んでください。本書が皆さんがオーストラリアを理解する手助けになり、またオーストラリアを好きになるきっかけになってくださることを願っています。

©Western Australian Government

CONTENTS

目次

はじめに

第1章　歴史と文化について知る

1　戦争のことを思い出すAnzac Day
2　fairを重んじるオーストラリア人
3　わずかなheritageも後世に残す
4　孤立するindigenous people
5　金と自由を求めるprospectorたち
6　royalを使えば「はく」が付く

第2章　自然環境について知る

1　biodiversityを尊重する
2　あこがれのbush暮らし
3　cane toadの侵略
4　思い出したころに起こるshark attack
5　大人も子供もsustainableを実践

第3章　社会制度について知る

1　労働者にうれしいannual leave
2　citizenship testが始まった
3　選挙の投票はcompulsory
4　検疫はdetector dogにお任せ
5　将来有望なビジネスは落書きのremoval
6　standard drinkを守って車に乗ろう
7　TEE目前でものんびりしている受験生

第4章　人との交流について知る

1　caravanningで老後をエンジョイ
2　"G'day, mate!"で、みんな仲間に！
3　roundを経てひと回り大きな人間になる
4　school ballで社会人への予行演習
5　street partyで近所と交流

第5章　日常生活について知る

1　農場経営はfamily business
2　非常事態に頼れるflying doctor
3　public auctionで家を買う
4　オージーに人気のsavoury pie
5　"Slip, slop, slap"で皮膚がん防止
6　どこもかしこもsmoke-free
7　watering dayを気にする生活

あとがき

表紙デザイン　美澤　修（omdr）

第1章　歴史と文化について知る

1　戦争のことを思い出すAnzac Day

2　fairを重んじるオーストラリア人

3　わずかなheritageも後世に残す

4　孤立するindigenous people

5　金と自由を求めるprospectorたち

6　royalを使えば「はく」が付く

戦争のことを思い出すAnzac Day

Anzac Day ―― アンザック・デー
（オーストラリアの戦争記念日）

4月25日のAnzac Dayは、戦争で戦った兵士たちを追悼する日。
各地で毎年、パレードなどの催しが行われています。

「戦争を忘れないための日」

日本では終戦記念日の前になると、政治家による靖国神社参拝の是非をめぐる議論がなされていたと記憶しています。オーストラリアにも、戦争にまつわる記念日が四月二十五日にあります。Anzac Dayというものです。

AnzacはAustralian and New Zealand Army Corpsの略で、英連邦の一員として第一次世界大戦に参戦した、オーストラリアとニュージーランドの連合軍（兵士）のことを言います。

第一次世界大戦中の一九一五年四月二十五日にトルコのガリポリという場所で激しい戦闘があり、多くのAnzacが負傷しました。そこでこの日を、兵士たちを追悼する日とし、いまでは、毎年各地で第一次・第二次世界大戦・ベトナム戦争などに参戦した退役軍人や軍関係の人たちによるパレードと、それに関連した催しが行われています。新聞は数日前から、Lest We Forget（戦争を忘れるなかれ）といった見出しを掲げ、パレードを見に行くように呼び掛けています。

▶戦争記念日に行われるパレード。彼女たちは従軍看護婦や、軍の事務関係の仕事をしていたのでしょう。

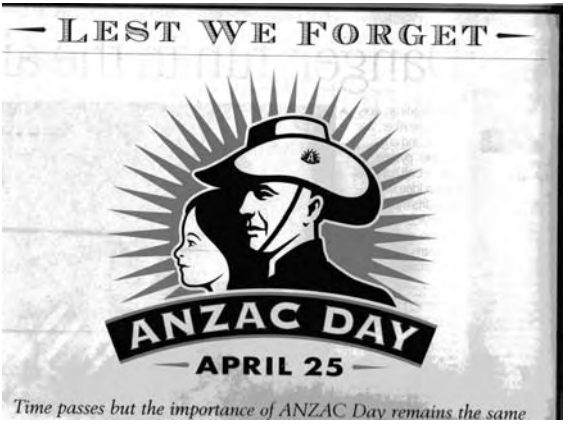
「伝説の人の死」

タスマニア州に住むアレク・キャンベルさんという老人が、二〇〇二年五月十六日に百三歳で亡くなりました。彼はガリポリ戦に参加したオーストラリア人の最後の生存者で、the last Anzacと呼ばれていました。二〇〇二年のAnzac Dayのパレードには参加したものの、翌月に亡くなり、タスマニア州葬で見送られました。

五月二十四日に行われた葬儀の翌日の新聞には、Farewell to a legend（さらば、伝説の人）と大きく報じられ、退役軍人に対する国民の関心の高さと尊敬の念を感じました。

「肩身の狭い日本人」

いまでは深い友好関係にある日本とオーストラリアですが、第二次世界大戦中に日本はオーストラリアの北部にあるダーウィンをはじめ、多くの町を数十回にわたり空爆し、大量の死傷者を出しました。また、東南アジアではオーストラリア



▶新聞*The West Australian*紙に掲載された全面広告。昔のことを忘れることなく戦争記念日を祝おうと呼び掛けています。

兵の戦争捕虜の多くが日本兵に虐待され、死亡しました。こういったことを知っている日本人はあまりいないのではないでしょうか。

毎年、Anzac Dayや八月十五日の終戦記念日のころになると、戦争捕虜を経験した人たちが日本兵の非道さを語る記事が新聞に載るので、こちらに住む日本人は肩身の狭い思いをします。Japという日本人を蔑視した、聞きたくない呼び名をテレビで聞いたり、新聞紙上で見たりするのもこの時期です。

戦後六十年以上たついまでも、日本人に反感を持ち、捕虜虐待に対して日本政府に賠償金を要求している人たちがいます。執拗なまでに筋を通して生きようとする彼らと比較すると、「過去のことは水に流して」式の割り切り方をする多くの日本人にどこか疑問を感じざるをえません。

▲戦争記念日にはパース市内のキングスパークにある戦争記念塔の近くで慰霊祭が行われます。 ©Gnangarra

fairを重んじるオーストラリア人

fair ―― 公平な

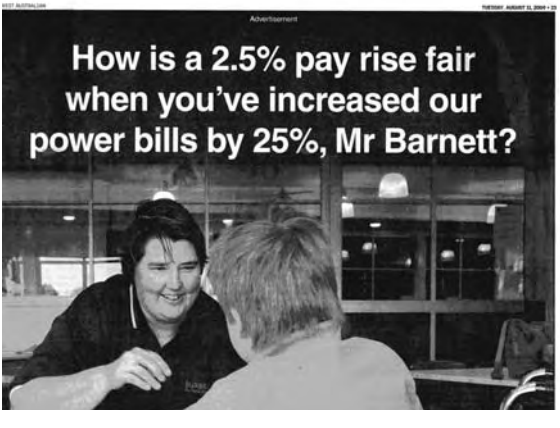
オーストラリアの中核となるのが、fairという概念です。
会話などでもこの語はよく使われます。
この国ではだれにでも平等に成功する機会が
与えられているのです。

「罪人から大金持ちに」

新天地オーストラリアでの豊かな生活を求めてやって来た初期の移民たち。彼らの多くは貧しい下層階級の出身でした。彼らがヨーロッパ本国のしがらみから解放され、新天地にfairな社会を作ろうとしたのも、しごく当然のことでしょう。

労働力としてオーストラリアに送られてきた囚人たちでさえも、刑期が過ぎれば自由民となることができました。中には成功の機会に恵まれ、大きな財産を築いた人もいたということです。新天地オーストラリアでは家柄・階級・人種などで差別されることはなく、だれにでも平等に成功の道が開かれていたのです。このfairという概念は、オーストラリアのバックボーンとして存在してきました。

下は、西オーストラリア州で発行されている日刊紙*The West Australian*に掲載された広告です。広告を出したのは、公立学校の補助教員たち。彼らは二十パーセントくらいの賃上げを要求したのですが、政府から提示されたのは、たった



の二・五パーセントでした。そこで、彼らは「電気代が二十五パーセントも上がっているのに、二・五パーセントの賃上げはfairだと思っているのか」と州知事に訴えているのです。

「日常会話にも頻繁に登場するfair」

こちらに来てから、fairを使った表現を数多く知りました。まず、fair goというオーストラリア独特の表現があります。これはFair go, mate!（公平にやろうぜ！）のように公平さをアピールするときに使われます。下のポスターは、小規模のビール製造会社が集まった団体が作成しているものです。このポスターでも、A fair go for craft beer（地ビールのために公平な扱いを！）と、fair goが使われています。

また、日常会話では、fair enoughという表現をよく耳にします。直訳すると「十分に公平だ」となりますが、口語では「それ（その条件）ならいいよ」のようなニュアンスで「了解」の意向を表すときに使われます。たとえば、「今晩三時間残業

◀地ビール業者は売り上げの25パーセントを税金として収めなければなりません。そこでこの団体は、酒税の引き下げを訴えた嘆願書の署名を集めているのです。

してくれないかな。賃金は倍額を払うから」と持ち掛けられたときに、Fair enough. I'll do it.（それならいいですよ。やりましょう）と言って承諾の意を伝えます。

「fairであることが同意の条件」

日本人の感覚では「了解」の意味でfairという語を持ち出すのは少々大げさな気もしますが、オーストラリアでは、「fairだと思わなければ同意しない」と言ってもいいくらい「公平であること」に対する思い入れが強いのです。

さて、このようにfairを重んじる国においても、不公平なことがまったくないわけではありません。「不公平だ」と感じることがあったら、すかさずIt's not fair.（それは不公平だ）あるいは砕けた表現のFair crack of the whip!（公平じゃないぞ！）と声を挙げて、議論を始めます。しかし、あくまでfairの精神にのっとった議論が展開されるだけ。腕力にものを言わせることがルール違反なのはもちろんのことです！

▲ ラッド政権は、労使問題に取り組むためにFair Work AustraliaやFair Work Ombudsmanを立ち上げました。

製品版を購入するには……

「オーストラリアの取説」

http://www.dlmarket.jp/product_info.php/products_id/185480

(DL-MARKET)